魂（たましい）とは何か
20250510

「本質」ではあるが実はない→幻想

肚、核、心の中の中心にあるもの→経験や知識の皮の内側にある

心→心情、生き様→脳の働き

傷つけてはいけない卵の黄身のようなもの

精魂込めて→意志力→生死を超えて

見えないもの、良心の呵責

天は見ている（知る）

経験から醸し出された核→精神の中心というか基底

心の中での深い部分、不動

自分を見ているもの、遊ぶ、自分を喜ばす

幽体離脱→キューブラー・ロス

魂は具象的（個々人のこころ）に響く→大和ことば

生と死→他者の死後思うこと

生命の源→自然の中で一体となる

宇宙の繋がりの中に霊魂がやどる

精神は抽象的、一般的→漢文字

精神→理念、理想、倫理性→物質的なものの上位にある

肉体と魂→肉体は滅びるが魂は不変、本質

動物にも魂はあるか→ある

一寸の虫にも五分の魂

魂を奪われる、憑依する

魂は生命の中に、関係としてある→生きる意志、生命力

心は脳の機能、魂はその態様の一つ

美しいものに心を奪われる

「たましい」には霊という字もある→宗教性と関連

魂は成長する、磨かれる→輝かせる→生きる意味

人と人との結びつき、関係、縁のこと

人だけでなく自然との関係→授かりもの

魂に働きかける、呼びかける

魂魄→死んだら一つは現世に残り、もう一つは天に行く→古代中国の考え

大和魂→和魂洋（漢）才ということがある

肉体と魂は一体か？→別れたら肉体的には死

魂、心、精神は肉体（物）と別のものか

「しきしまのやまと心を人問はば朝日にひほふ山桜花」本居宣長

やまと心（魂）とは自然の恵みに感謝し、おおらかに和する心のこと（猛々しい心ではない）

脳死では魂、心、精神はどうなる

肉体は過去に戻れないが、魂や精神は過去に帰ってやり直すことができる

死者との対話→命累々歴史となる

だれもがかけがいのない命→「代わり」はいない

尊厳のある死（〇〇人死亡という言葉ではない）

魂を磨く？ということ

宗教性との関連大→神道（古）→仏教伝来→浄土系、禅系仏教の展開（鈴木大拙）

神道→原始的習俗→後に禅と結びついて霊性意識を獲得

万葉集→古代の素朴な自然生活、生れながらの情緒そのまま→生まれ変わらぬ魂の生活

平安時代→宮廷の色恋沙汰中心の箱庭文化→もののあはれ→大地にかかわりのない命＝観念にすぎない

鎌倉期→武士の台頭→大地に起伏する人間⇒農民から出て真実性を持った→浄土真宗、禅により霊性を獲得→激しい闘争があった

精神（心）と物（物質）の対立ではなく、二つのものが一つであること→霊性

霊性は生命→自分の生命の内からのもの→大地と自分とは一つのもの

大地の底は自分の存在の底→本当の生命、真実の生活

石牟礼道子→『苦海浄土』

生類という大きな命に包まれているとき、はじめて人類たりうる

「授かる」と感じるものの心中には感謝と信頼がある→魂

世界と繋がる、人間が他者と繋がる在り方→真実のあり方→人間のあり方